

| 世界遺産 |

# 石見銀山遺跡と

Iwami Ginzan Silver Mine and its Cultural Landscape

# その文化的景観

石見銀山発見  
500年  
500TH ANNIVERSARY

2027(令和9)年、石見銀山は発見から500年を迎えます。

# 石見銀山の世界遺産としての価値

## ii 世界的に重要な経済・文化交流を生み出した

石見銀山では、灰吹法<sup>はいふきほう</sup>\*という製錬技術を取り入れることによって銀の現地生産を軌道に乗せ、良質な銀を大量に生産しました。

さらに、石見銀山で用いられた技術が国内のほかの鉱山にも伝わったことで、16世紀から17世紀にかけての日本は、銀の一大生産国となりました。

日本で生産された大量の銀は、東アジアの貿易や、金銀や香辛料を求めて世界に活動範囲を拡げつつあったヨーロッパ人の、東アジアとの貿易に大きな役割を果たしました。

石見銀山の銀生産は、東西の異なる世界の経済・文化交流の原動力となったのです。

\*灰吹法…13ページ参照



オルテリウス/タルタリア (韃靼) 図 (1570年)  
日本に「Minas de plata」(銀鉱山)の記載あり (島根県立古代出雲歴史博物館蔵)

## iii 伝統的技術による銀生産方式を豊富で良好に残す

石見銀山では、採掘から精錬までの作業は、すべて人力・手作業で行われました。そして、このような作業を行う場所が多数集まることによって、高品質の銀の大量生産を達成していました。

このような伝統的技術による銀生産を証明する多くの露頭掘り跡や坑道跡、また、これらに隣接した製錬工房や生活の場の跡が、現在でも良好な状態で保存されています。



釜屋間歩周辺遺構

## v 銀生産の全体像を示す文化的景観である

石見銀山には、銀の生産から搬出に至る鉱山運営の全体像を示す遺跡(鉱山跡や鉱山町、銀や物資を輸送した街道、積出や荷揚げを行った港や港町、これらを外敵から守った城跡)が残されています。

そしてその一部は、現在でも人々の生活の場となると同時に、周囲の豊かな自然環境と一体となって、世界的にも貴重な文化的景観<sup>\*</sup>を形成しています。

\*文化的景観…人間が自然と共生する中で育んできた景観地



大森の町並み

## 世界遺産

### 石見銀山遺跡とその文化的景観

島根県大田市にある石見銀山は、1527年\*に発見されて以降、1923年の休山まで約400年にわたって操業が行われた、日本を代表する鉱山遺跡です。

2007年7月に「石見銀山遺跡とその文化的景観」として、国内では14件目、鉱山遺跡としてはアジアで初めての世界遺産に登録されました。

\*これまで、石見銀山が発見された年は1526年とされてきましたが、その後の調査研究により1527年であったことが分かりました。

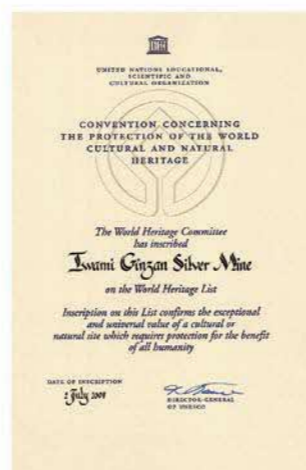


左から文禄石州丁銀、御取納丁銀、御公用丁銀 (島根県立古代出雲歴史博物館蔵)

### 世界遺産とは

世界遺産とは、1972年のユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」に基づいて、世界遺産リストに記載(登録)された、「顕著な普遍的価値」をもつ文化遺産や自然遺産のことです。

人類共通のかけがえのない財産として国際的に保護・保全し、将来の世代へ伝えていくことを目的としています。



世界遺産認定書

### 世界遺産の評価基準

世界遺産に登録されるためには、次のいずれかの「顕著な普遍的価値」を有している必要があります。

また、世界遺産としての価値を将来にわたって継承していくための保護・管理措置が講じられていることなども求められます。

- i 人類の創造的才能を表す傑作である
- ii 建築、技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間または世界のある文化圏内の価値観の交流を示すものである
- iii 現存する、あるいはすでに消滅した文化的伝統や文明の存在に関する独特な証拠を伝えるものである
- iv 人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、建築技術または科学技術の総合体、あるいは景観の顕著な見本である
- v ある文化(または複数の文化)を特徴づけるような伝統的集落や土地・海上利用の顕著な見本。又は、人類と環境とのふれあいを代表するような顕著な見本である(特に、不可逆的な変化によりその存続が危うくなっている場合)

- vi 顕著で普遍的価値を持つ出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連があるもの(この基準は、他の基準とあわせて用いられることが望ましい)
- vii 最上級の自然現象、又は、類まれな自然美・美的価値を有する地域を包含する
- viii 生命進化の記録や、地形形成における重要な進行中の地質学的過程、あるいは重要な地形学的又は自然地理学的特徴といった、地球の歴史の主要な段階を代表する顕著な見本である
- ix 陸上・淡水域・沿岸・海洋の生態系や動植物群集の進化、発展において、重要な進行中の生態学的過程又は生物学的過程を代表する顕著な見本である
- x 学術上又は保全上顕著な普遍的価値を有する絶滅のおそれのある種の生息地など、生物多様性の生息域内保全にとって最も重要な自然の生息地を包含する

「石見銀山遺跡とその文化的景観」は、「銀鉦山跡と鉦山町」、「港と港町」、「街道」の3つの分野から成っています。

## 銀鉦山跡と鉦山町

16世紀前半から20世紀前半にかけて操業された銀鉦山の開発の諸様相を良好に残す鉦山本体と、それに伴って発達した鉦山町および支配関連の山城跡。

1 銀山柵内	16世紀前半から本格的に開発され、20世紀前半まで操業された銀鉦山遺跡の本体。江戸時代初め、柵で厳重に囲まれていたことからこの名がある。銀の生産活動はもちろんのこと、生活・流通・信仰・支配に関わる遺構・遺物が良好に残る。
2 代官所跡	17世紀に銀山柵内から大森地区に移転した石見銀山支配の中樞施設跡。1815年に再建された表門・門長屋が残る。
3 矢滝城跡	石見銀山を防御するための山城跡の一つで、温泉津沖泊道が近くを通る。中世山城の立地・形態をよく留める。
4 矢筈城跡	石見銀山を防御するための山城跡の一つで、温泉津沖泊道を挟んで矢滝城と対峙する。中世山城の立地・形態をよく留める。
5 石見城跡	石見銀山を防御するための山城跡の一つで、仁摩方面に出る街道沿いを守備する。中世山城の立地・形態をよく留める。
6 大森銀山重要伝統的建造物群保存地区	鉦山に隣接して発展した、江戸時代幕府直轄地の石見銀山附御料150余村の中心町。武家・商家の旧宅や、社寺などが混在してよく残る。昭和62年の国選定。
7 宮ノ前地区	大森地区の代官所跡近くで発見された、16世紀末～17世紀初頭の銀製錬工房跡。
8 重要文化財熊谷家住宅	大森地区における最大規模の商家建築。有力商人の地位や生活の変遷を最もよく示している。
9 羅漢寺五百羅漢	岩盤に3つの石窟を穿ち、石造の三尊仏と羅漢坐像500体を安置する。18世紀中頃の制作で、石見銀山の石造物文化を代表する信仰遺跡。

## 港と港町

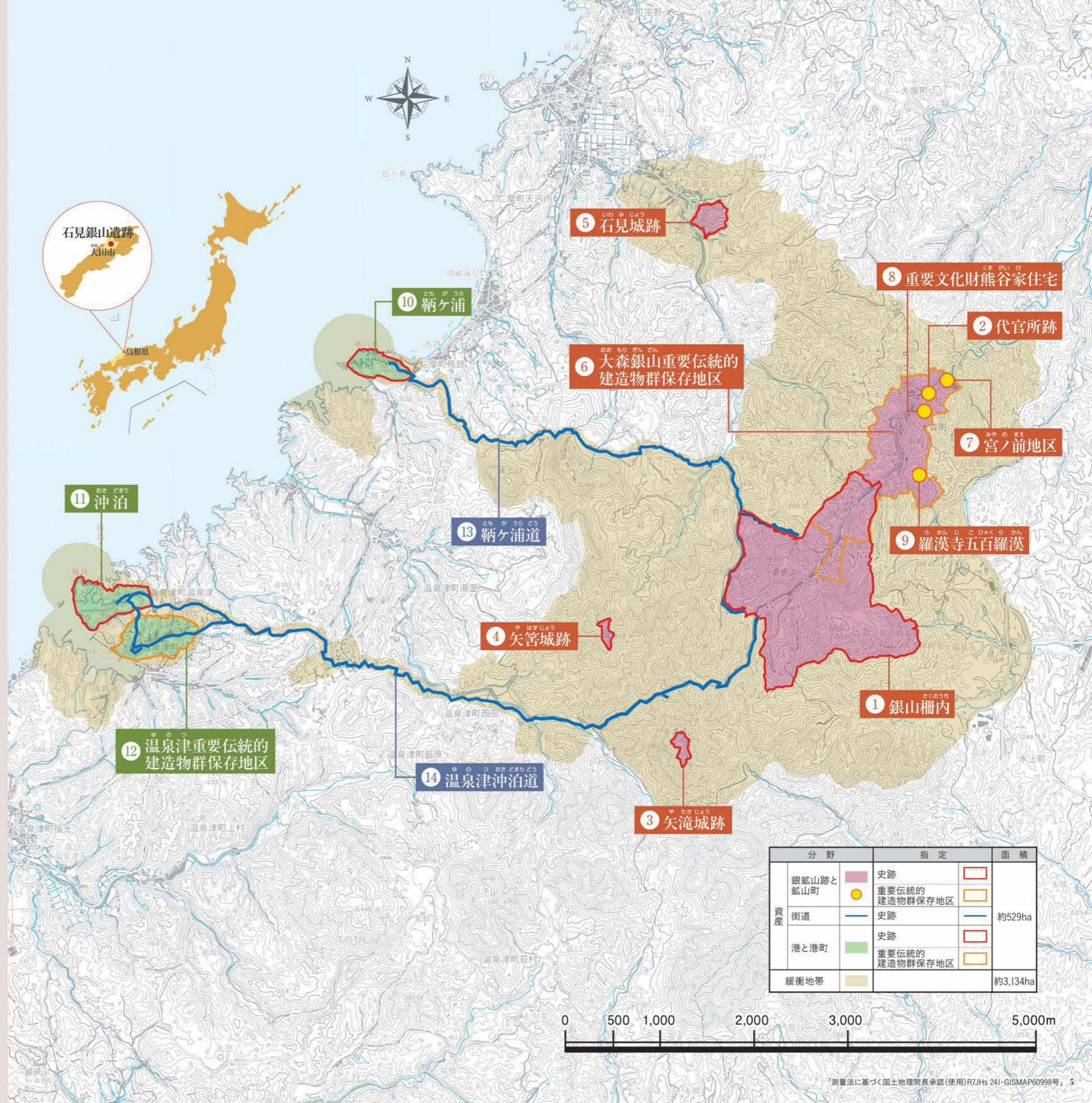
石見銀山で産出した銀・銀鉦石の積み出しに利用された二つの港湾と、これに隣接して発達した港町および港湾集落。

10 鞆ヶ浦	16世紀前半から中頃にかけて銀・銀鉦石を博多に積み出した港。船の係留用に自然の岩盤をくり抜いた鼻ぐり岩などが残る。繁栄した頃の土地利用を引き継ぐ集落景観としても貴重。
11 沖泊	主に16世紀後半の約40年間、銀の輸送や、石見銀山への物資補給、軍事基地として機能した港。二つの城跡や鼻ぐり岩などが残る。温泉津と一体となって歴史を重ねた場所であり、集落は往時の土地利用を今に引き継いでいる。
12 温泉津重要伝統的建造物群保存地区	石見銀山の外港として発展した温泉のある港町。江戸時代以来の町割りをよく残し、町屋、廻船問屋、温泉旅館、社寺等の伝統的建造物がよく残る。平成16年の国選定。

## 街道(石見銀山街道)

石見銀山から二つの港湾に向けてつながる、銀・銀鉦石と諸物資の輸送路。

13 鞆ヶ浦道	鞆ヶ浦が銀・銀鉦石の積出港として機能していたときに利用された全長約7kmの街道。
14 温泉津沖泊道	石見銀山の外港であった温泉津・沖泊と柵内を結ぶ全長12kmの街道。17世紀初頭に尾道道が開発された以降も銀山と港を繋ぐ幹線路として利用。



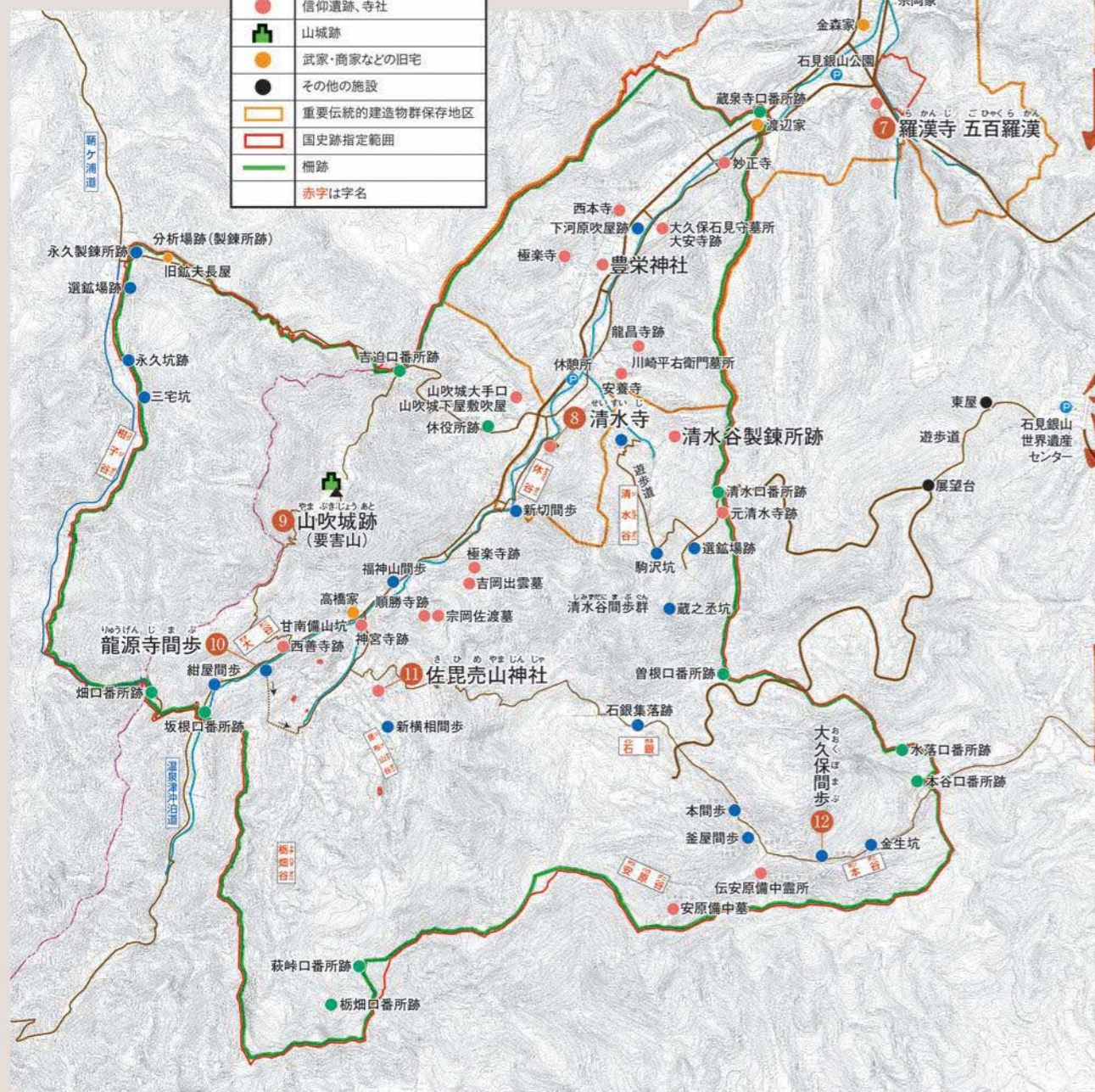
分野	指定	面積
銀鉦山跡と鉦山町	史跡	約529ha
	重要伝統的建造物群保存地区	
街道	史跡	
	重要伝統的建造物群保存地区	
港と港町	史跡	
	重要伝統的建造物群保存地区	
緩衝地帯		約3,134ha

# 銀鉦山跡と鉦山町

## 鉦山町(大森銀山)

江戸時代、2代目奉行の竹村丹後守が石見銀山支配の拠点となる現在の代官所跡に移転して以降、幕府が直接支配した「銀山附御料」の中心として繁栄した町です。武家屋敷や商家、郷宿(公用で代官所に来た人が泊る宿)など、江戸時代の陣屋町としての機能を示す建物が良く残されています。

記号	内容
●	生活遺跡
●	支配関係遺跡
●	生産遺跡、主要間歩
●	信仰遺跡、寺社
■	山城跡
●	武家・商家などの旧宅
●	その他の施設
■	重要伝統的建造物群保存地区
■	国史跡指定範囲
■	柵跡
●	赤字は字名



## [主な場所]



① 代官所跡/いも代官ミュージアム (石見銀山資料館)

江戸時代、石見銀山支配のために置かれた代官所の跡地です。表門とその左右の門長屋は、1800年に起こった大森町の大火の後に建てられたものです。敷地内には、大正時代に建てられた旧瀬摩郡役所の建物を活用した石見銀山資料館があります。



② 勝源寺

石見銀山の2代目奉行の竹村丹後が大檀那となって造った寺院です。徳川家康を祀る東照宮があるほか、幕府に関わる貴重な資料も伝わっています。境内には、竹村丹後の墓のほか代官の墓所もあります。



④ 城上神社

大森町の氏神として、信仰を集めていた神社です。拝殿は1812(文化9)年の建築で、内部の天井には龍が描かれています。その下で拍手を打つと音が反響することから「鳴き龍」とも呼ばれています。



⑦ 羅漢寺五百羅漢

18世紀中頃、石見銀山の安寧などを祈願して作られました。岩盤斜面に3カ所の石窟があり、中央窟に石造釈迦三尊像を、左右両窟には250体ずつの石造羅漢坐像を安置しています。



③ 大森代官所地役人遺宅旧河島家

寛政の大火後、1800年代初頭に建築された代官所地役人遺宅です。常時公開されている武家屋敷の一つで、建物内部では地役人の暮らしを物語る調度品などが展示されています。



⑤ 熊谷家住宅

熊谷家は金融業などを営みながら、町役人や代官所の御用商人を務め、19世紀には大森町の中でも最も有力な商家として栄えた家です。現在の建物は1801年の再建で、平成の大規模な保存修理工事により、幕末から明治初年の姿に復元されています。



⑧ 清水寺

もともとは仙ノ山の石銀にあったとされますが、その後、清水谷を経て、1878(明治11)年に現在地に移ってきました。石見銀山に縁のある多くの文化財が伝わっています。



⑪ 佐毘売山神社

鉦山の守り神である「金山彦命」を祀る神社で、創建は15世紀の中頃とされています。現在の建物は1819(文政2)年の建築で、鉦山の神様を祀る「山神社」としては全国的に見ても最大級の規模を誇ります。



⑥ 井戸神社

第19代の大森代官を務めた井戸平左衛門正明を祀る神社です。井戸平左衛門は、薩摩からさつま芋を取り寄せて栽培を広め、領民を飢饉から救ったとされる代官で、現在でも「いも代官」として慕われています。



⑨ 山吹城跡

銀山守備のために築かれた山城です。頂上付近の主郭を中心に空堀、堅堀などが設けられています。戦国時代には、この城を舞台に石見銀山の支配権をめぐる攻防戦が繰り返されました。



⑩ 龍源寺間歩

江戸から明治にかけて採掘された、石見銀山では最大級の坑道です。内部には、採掘によって生じた巨大な空間が存在しています。3月から11月の主に週末を中心として、限定公開が行われています。



⑩ 龍源寺間歩

江戸時代には周囲が柵で囲まれ、出入口には番所が置かれて物資や人の出入りが管理されていました。仙ノ山頂上付近の石銀から東側斜面の本谷周辺は、16世紀から17世紀にかけての銀鉦石の採掘や銀製煉関係の遺構が集中して残っています。本谷周辺では、徳川家康に献上した銀を産出したと伝わる釜屋間歩や、最大級の坑道跡である大久保間歩などを見ることができます。

## 銀鉦山跡

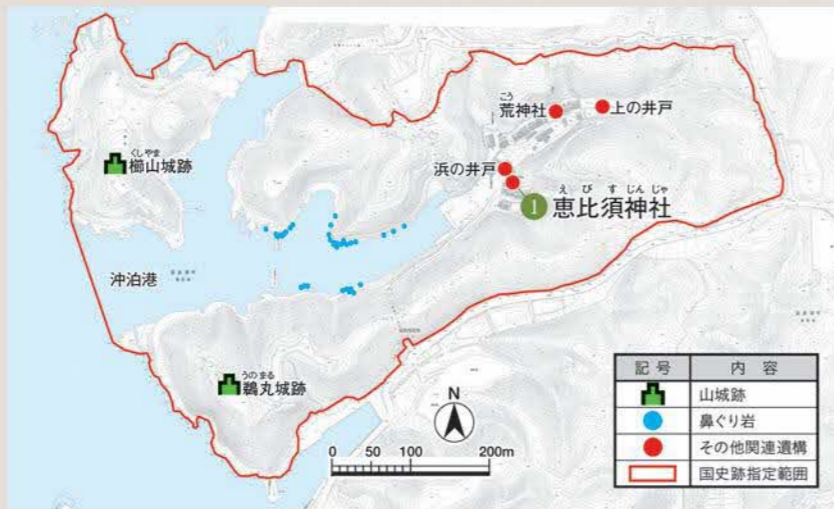
江戸時代には周囲が柵で囲まれ、出入口には番所が置かれて物資や人の出入りが管理されていました。仙ノ山頂上付近の石銀から東側斜面の本谷周辺は、16世紀から17世紀にかけての銀鉦石の採掘や銀製煉関係の遺構が集中して残っています。本谷周辺では、徳川家康に献上した銀を産出したと伝わる釜屋間歩や、最大級の坑道跡である大久保間歩などを見ることができます。

# 港と港町

Ports and port towns

## 沖泊

沖泊は、毛利氏が石見銀山を支配した16世紀後半、銀の積み出しと石見銀山への物資補給が行われた港です。港の両岸には寄港した船をつなぎ止めておくための「鼻ぐり岩」が残っています。また、港の防衛のため築かれた2つの山城跡もあります。



## 温泉津

石見銀山の外港として発展した、温泉のある港町です。戦国武将や文人墨客が訪れた地としても知られています。江戸時代以来の町割りを引き継いだ全長800mほどの町並みには町屋、廻船問屋、温泉旅館、社寺などの伝統的建造物がよく残されています。



### [主な場所]



① 恵比須神社

沖泊集落の海岸に面した岩山上にある、銀山にゆかりのある航海安全の神社です。本殿は、様式と建築材から16世紀末頃に建立されたと考えられています。



② 温泉津港

江戸時代には西回り航路の寄港地になり、諸国の廻船が入港しました。港の近くには大きな敷地を持つ旧廻船問屋の屋敷などが立ち並び、「港町」の面影を残しています。



③ 恵瑠寺

文化人として名高い戦国武将の細川幽斎が連歌会を催した寺院として知られています。境内には、初代奉行大久保長安の逆修塔があります。



④ 龍御前神社

航海の安全を祈願する神社として、廻船業を営む人々から信仰を集めました。境内には、その様子を今に伝える船給馬や石灯籠が残されています。



## 鞆ヶ浦

石見銀山が開発されて間もない頃、博多から銀鉱石を求めて鞆ヶ浦に多くの商船が来航し、繁栄したとの記録があります。江戸時代初期には漁村となり、その後大規模な開発もなかったことから中世港湾の形態を残しています。

## 鞆ヶ浦道

鞆ヶ浦が銀鉱石の積み出し港であった16世紀前半、石見銀山から日本海へ出る最短の搬出路として利用されました。全長7kmほどの距離があり、勾配のある狭い道には土橋や切土など道普請の跡や往来する人々の交通安全を願った石碑・石仏などが残っています。

## 温泉津沖泊道

温泉津沖泊が石見銀山支配の拠点とされ、その外港となった16世紀後半に銀の搬出と諸物資の搬入のために利用された道です。全長12kmほどの距離があり、道中には石畳や土橋、道標や石仏などがよく残っています。石見銀山から急な勾配の降路坂を越えると二手に道が分かれて温泉津と沖泊に至ります。



### [主な場所]



① 火伏観音

西田の町の中程にある岩窟には火伏観音が祀られています。岩窟の前には、1578(天正6)年銘の石塔などが置かれています。



② 松山の道標

温泉津沖泊道のうち、石段が良く残る場所にある道標です。周囲には、石切り場跡や土橋もみられ、往時の様子を偲ぶことができます。



③ 清水の金柄杓

清水集落にある岩と民家の石垣に囲まれた、清水が湧き出る泉です。大森代官が清水のおいしさに感心し金柄杓を奉納し、この呼び名になったと言われています。



④ 西田の農村風景

街道沿いの宿場町として発展した西田集落の周辺には、棚田に代表される農村景観がよく残っています。秋になると、この地方独特の「ヨヅクハデ」が作られます。

# 街道

Kaido



# 石見銀山の歴史

## History of Iwami Ginzan

石見銀山は1527(大永7)年に博多の商人である神屋寿禎によって発見されました。1533(天文2)年に灰吹法が導入されると、石見銀山の銀生産が本格化し、大量の銀が生産されることとなります。

当初、石見銀山は守護大名大内氏の支配下にありましたが、その後毛利氏の支配となり、関ヶ原の戦いまでの約40年間は毛利氏による支配が続きました。

江戸時代に入ると、石見銀山は徳川幕府の直轄地となります。幕府から派遣された奉行・代官のもとで運営されましたが、産銀量は次第に停滞する一方で生産コストは増大するなど、銀山の経営を取り巻く状況は悪化していきました。幕末には、長州軍の占領によって、270年近く続いた徳川幕府による支配は終焉を迎えました。

明治時代には、大阪の藤田組によって近代的な開発が進められ、再び活況を取り戻します。しかし、その後銅価格の下落などによる経営の悪化で、1923(大正12)年に休山となり400年にわたる石見銀山の鉱山としての歴史は幕を閉じました。

※1938(昭和13)年に公布された「重要鉱物増産法」により、翌年から採鉱を再開しますが、1943(昭和18)年に石見地方を襲った大水害で壊滅的な被害を受け、経営再開は断念されました。

### 石見銀山の歴史略年表

時代	西暦	年号	領有経営主体	主な出来事
鎌倉	1308~1311年	延慶年間		初めて石見銀山が発見されたという(「銀山旧記」)
室町	1527年	大永7年	大内氏	博多の商人・神屋寿禎(かみやじゅてい)、石見銀山を発見する
	1533年	天文2年		石見銀山で灰吹法(はいふきほう)による銀精錬がはじまり、以後国内の他鉱山に広まる
	1556~1562年	弘治2~永禄5年	毛利氏/尼子氏	毛利氏と尼子氏が互いに銀山の争奪戦を展開し、やがて毛利氏が支配する
	1568年	永禄11年	毛利氏	ポルトガル/ドラードの日本図に「銀山王国」の記載がある
	1595年	文禄4年		ティセラ『日本図』に「銀山」と記される
江戸	1600年	慶長5年	徳川幕府	関ヶ原の戦いの後、徳川氏が領有
	1601年	慶長6年		大久保長安が初代石見銀山奉行となる
	1603年	慶長8年		山師安原備中が年3600貫(13.5t)の銀を納め、徳川家康に謁見する(「銀山旧記」)
	1624年	寛永元年		銀山全体の銀産出量が減少し始める
	1731年	享保16年		井戸平左衛門が大森代官となる
	1732年	享保17年		享保の大飢饉。井戸平左衛門がサツマイモの植え付けを奨励した
	1766年	明和3年		石窟五百羅漢が25年の歳月を経て完成し、羅漢寺が創建される
	1800年	寛政12年		大森大火により町の大半が焼失。翌年、熊谷家住宅が再建される
	1815年	文化12年		大森代官所門長屋が再建される
	1866年	慶応2年		長州藩
1867年	慶応3年	大政奉還		
明治	1869年	明治2年	明治政府	一時的に明治政府の管理下に置かれる
	1872年	明治5年	民営鉱山	浜田地震により坑道崩落などの被害を受ける。五百羅漢の石窟も一部崩落する
	1879年	明治12年		大森に井戸神社が創建される
	1886年	明治19年		大阪・藤田組が「藤田組大森鉱山所」を設立。翌年、経営開始
	1895年	明治28年		清水谷製錬所完成
	1896年	明治29年		清水谷製錬所操業休止。以後、操業の中心は永久地区となり、銅生産が主力となる
大正	1917年	大正6年	藤田組	第一次世界大戦に伴う需要増加のため増産。近代操業のピーク(銀4.2t、銅477t)
	1923年	大正12年		第一次世界大戦後の銅相場低下により経営不振となり、休山となる
昭和	1939年	昭和14年		前年制定された「重要鉱物増産法」により、株式会社藤田組が採鉱再開を目指す
	1942~1943年	昭和17~18年		銅採掘を試みるが大水害により設備流失、坑道水没などの被害を受け、経営再開を断念

## 調査・研究が進む石見銀山

石見銀山の全容と価値を明らかにするため、平成8年度から鳥根県と大田市が共同で、各分野の調査を実施しています。

### 発掘調査

地下に埋もれている、銀生産、人々の生活や信仰、支配等に関する遺構や遺物を、考古学的な手法で調査しています。また、遺跡整備に必要な情報を得るための調査も行っています。

これまでの調査で、銀製錬に使用したと考えられる鉄鍋や、灰吹銀などを発見しました。



### 石造物調査

人々の信仰や葬送儀礼、社会の営みなどを、墓石を中心とする石造物から明らかにしようとする調査です。遺跡をくまなく歩いて概数を調べる分布調査、宗派・立地・残り具合などから特徴的な墓地を調べる詳細調査などを行っています。

### 文献調査

古文書をはじめとする文献史料を手がかりに、石見銀山とその周辺地域の歴史を明らかにする調査です。関係する古文書の目録作成や写真撮影、解説を行っています。



### テーマ別調査研究

石見銀山での基礎調査研究で得られた成果をもとに、テーマを決めて学際的な調査・研究を行うのがテーマ別研究です。

「最盛期の石見銀山」と、世界遺産登録時の付帯事項として世界遺産委員会から要請のあった鉱山比較を行う「東アジア鉱山比較」という2つのテーマで調査研究を行っています。

### 科学調査

発掘調査などで得られた資料を、科学的方法を用いて分析する調査です。分析によって得られたデータをもとに、鉱山技術の詳細を明らかにすることを目指しています。

これまでの調査で、鉱床の違いが銀製錬の工程に大きく影響を及ぼすことが分かっています。

## 保存・整備が進む石見銀山

石見銀山を将来の世代に確実に引き継いでいくために、老朽化した文化財の保存修理事業や遺跡の整備事業が行われています。

石見銀山では、文化財保護法や鳥根県文化財保護条例、大田市文化財保護条例等により、現状を変更したり、保存に影響を及ぼす行為をしようとするときは、あらかじめ許可を得る必要があります。



# 銀生産の過程

銀はどのように生産されていたのでしょうか？  
ここでは江戸時代の鉱山絵巻に描かれた工程を見てみましょう。



## 掘り出す

鉱石の掘り出しは「銀掘」と呼ばれる人々によって行われました。採掘は鉄子(鑿)を山簀で挟み、それを山鉋でたたいて行われていたようです。また灯はサザエの殻などに油を入れ、そこに火をともした「螺灯」が使われていました。1858(安政5)年の記録では、39人が昼夜二交代制で、「銀掘」が24人、「手子」と呼ばれ掘る手伝いをする10才前後の子どもが10人いたと記述されています。

# 銀鉱石を掘り出す

## 運び出す

採掘された鉱石や、採掘に伴って出る不要な石は、「柄山負」と呼ばれる人によって運び出されています。



## 砕く、選り分ける

間歩から運び出された銀鉱石は、「要石」という石の上に乗せられ、かなづちで砕かれて小さくされます。その後水の中でゆすりながらより分けられました。

## 3

## 素吹する

細かくされた銀鉱石に鉛とマンガンなどを加えて溶かし、貴鉛という銀と鉛の合金が作られました。



貴鉛(大田市教育委員会蔵)

## 貨幣にする

生産された灰吹銀は、江戸時代には京都(寛政の改革以降は江戸)の「銀座」に運ばれ、各地から集められた灰吹銀と合わせて、丁銀などの銀貨幣が作られました。

享保丁銀(島根県教育委員会蔵)



江戸時代の掘る道具

## 坑道内での対策

採掘が順調に行われるよう、坑道内ではさまざまな対策がとられていました。

### 其の2 換気対策

坑道の奥は換気が悪く、病気になる人も多く出たようです。そこで唐箕を改良した送風装置が生み出され、坑内に空気を送るのにつかわれていました。



### 其の1 水対策

地下深く掘り進むと、湧き水が出てきます。これを木製ポンプのようなもので排水していました。



## 5 灰吹する



灰吹銀(大田市教育委員会蔵)

貴鉛を「灰吹床」で加熱して溶かして鉛を灰へ染み込ませ、灰の上に銀だけが残るよう分離させます。その後、同様の作業を繰り返して、灰吹銀の純度を上げていました。

## Question

### 灰吹法とは？

様々な物質が混在する鉱石の中から金属を取り出す作業を「製錬」と呼びます。その製錬した金属から不純物を取り除いて純度を高めることを「精錬」といいます。灰吹法は精錬方法の1つで、銀と鉛の合金を、灰を詰めた炉で溶かし、灰の上に銀だけを残すというものです。石見銀山には1533(天文2)年に朝鮮半島から導入されたと考えられています。その証拠となる鉄鍋が、発掘調査により確認されました。



鉄鍋(大田市教育委員会蔵)

鉄鍋保存処理状況

大森銀山図解(中村俊郎氏蔵)



## 産銀量はどのくらい？

## 石見銀山の

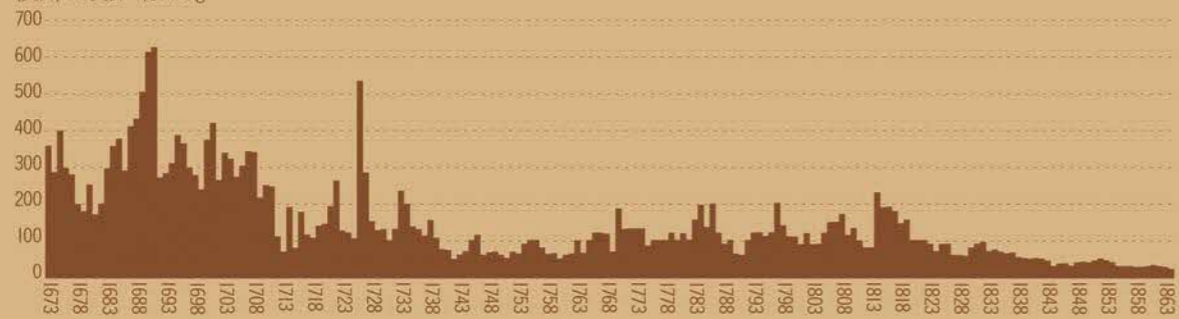
石見銀山の最盛期である16世紀から17世紀前半には大量の銀が採掘されていたといわれています。その量は、世界の産出銀の約3分1を占めていたといわれる日本銀のかなりの部分を産出していたと考えられていますが、具体的な数値はわかっていません。

江戸時代に入ると、初代奉行大久保長安による鉱山改革が行われ、銀の生産量は大幅に増加し、第2次シルバーラッシュを迎えました。なかでも、山師安原伝兵衛が開発した釜屋間歩は1年間で銀3600貫(13.5t)を徳川家康に納めたことが「銀山旧記」に記されています。

最盛期を過ぎた1673(延宝元)年以降は記録により具体的な量の推移を知ることができます。幕末に至るまでの石見銀山は鉱石の粗鉱化や坑道が地中の奥深くまで達することによる地下水の湧き出しなどによって開発は困難を極め、産銀量は増減を繰り返しながら減少していきました。

石見銀山の産銀量の推移(1673(延宝元)年～1864(元治元)年)

(貫目) ※1貫目=約3.75kg



出典:「石州銀山支配御代官年代記並諸口屋歩一諸運上出灰吹銀年々納高」(石見銀山資料館蔵)



古丁銀 (島根県立古代出雲歴史博物館蔵)



## 豊栄神社 —江戸の終焉と 明治の始まり—

豊栄神社は、江戸時代までは「長安寺」というお寺でした。戦国時代に毛利氏の家臣によって創建されたと言われています。

幕末の幕長戦争で長州藩軍が幕府軍に勝利した結果、石見銀山領は長州藩の支配下となり、大森陣屋に駐屯した長州藩士たちは長安寺の復興に尽力しました。

1869(明治2)年2月には朝廷から毛利元就に「豊栄」の神号が授与され、1870(明治3)年7月に長安寺は「豊栄神社」として存続することになりました。

豊栄神社には、長州藩士たちが挙って寄進した鳥居、燈籠、狛犬などの石造物が今も残っています。これらは江戸の終焉と明治の始まりという激動の時代を今に伝える貴重な資料でもあるのです。

## いも代官

江戸時代の石見銀山は産銀量の減少や生産コストの増大、飢饉や鉱山病などの諸問題を抱えながら開発が進められていきます。歴代の奉行・代官はそうした困難に対して様々な施策を講じました。その功績から、今でも人々から慕われる人物がいます。

19代目の大森代官である井戸平左衛門は、享保の大飢饉の際、薩摩からさつま芋を苦勞して取り寄せ、栽培を奨励して領民を救った代官として伝えられています。彼を称える頌徳碑は石見銀山周辺にとどまることなく、島根県外にも及び、その総数は500基以上にもなります。

1879(明治12)年には井戸平左衛門を祭神とする井戸神社が創建され、1916(大正5)年に現在の地に移されました。移設にあたっては、内閣総理大臣の桂太郎をはじめ渋沢栄一など政財界からも寄付が寄せられました。



井戸平左衛門肖像(井戸神社蔵/石見銀山資料館提供)

明治時代の石見銀山は、藤田組という企業が開発を進めました。藤田組は、西洋の技術を積極的に導入し、近代的な施設の整備を進めました。そのような施設の 하나가清水谷製錬所です。

清水谷製錬所は、主に福石鉱床で採掘された鉱石を製錬するため、1894(明治27)年から建設が始まり、翌1895(明治28)年に操業が開始されました。当時撮影された写真には、階段状に建物が並んでいる様子が映っていますが、江戸時代とは異なり規模の大きな施設であったことがわかります。

期待したほどの品位が採掘された銀鉱石になかったことなどから、操業期間はわずか1年ほどでしたが、現在も残る基礎部分が当時を偲ばせています。

## 明治時代の 石見銀山



# 世界遺産を巡るモデルコース

## Model Course 1 大森・銀山めぐり



## Model Course 2 温泉津めぐり



### 現地情報・ガイドのお問い合わせ

#### 石見銀山世界遺産センター

〒694-0305  
島根県大田市大森町イ597-3  
TEL 0854-89-0183 FAX 0854-89-0089  
<https://ginzan.city.oda.lg.jp/>



Webはこちら

#### 大田市観光協会

〒699-2301  
島根県大田市仁摩町大國42-1  
TEL 0854-88-9950 FAX 0854-88-9960  
<https://www.ginzan-wm.jp/>



Webはこちら

#### 石見銀山ガイドの会

〒694-0305  
島根県大田市大森町イ824-3  
TEL 0854-89-0120 FAX 0854-89-0706  
<https://iwamiginzan-guide.jp/>



Webはこちら

#### 温泉津観光案内所(ゆう・ゆう館)

〒699-2501  
島根県大田市温泉津町温泉津イ791-4  
TEL 0855-65-2065  
[https://www.ginzan-wm.jp/purpose\\_post/yuyukan/](https://www.ginzan-wm.jp/purpose_post/yuyukan/)



Webはこちら



# 石見銀山

WORLD HERITAGE

このマークは、世界遺産である石見銀山遺跡を構成する間歩や山、海などの資源をモチーフにし、公式マークとして石見銀山協働会議が作成しました。



Webはこちら

編集・発行

島根県教育庁文化財課世界遺産室

〒690-8502 島根県松江市殿町1番地 TEL 0852-22-5642 FAX 0852-22-5794  
<https://www.pref.shimane.lg.jp/life/bunka/bunkazai/ginzan/>